

氏名	田中美恵子		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	甲第216号		
学位授与年月日	2020年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	川上貞奴の演劇活動 先駆者としての試み (Kawakami Sadayakko's Life on the Stage: Her Pioneering Efforts in the Theater)		
論文審査委員	主査	特任教授	小島康敬
	副査	法政大学教授	高澤紀恵
	副査	教授	ロバート エスキルドセン
	副査	上級准教授	矢内賢二

論文内容の要旨

本論文は、1899(明治32)年から1933(昭和8)年の間に川上貞奴(1871-1945)が試みた演劇活動に着目し、そこに通底する貞奴の意思を明らかにすることで、近代日本の演劇の先駆者としての川上貞奴の姿をとらえようとするものである。貞奴の演劇活動である「お伽芝居」、「女優養成所」開設、「川上児童楽劇園」創設、「貞照寺」建立のすべてが現在の観点からしても斬新で、当時の人々の注目を集めるものであった。しかし長きにわたり評価されることなく見過ごされているのが現状である。

貞奴の演劇における試みを彼女が身を置く環境や社会状況を通して読み解くことで、貞奴の演劇界への貢献に光をあてるだけでなく、活動の挫折に踏み込むことこそが、近代日本の演劇界における貞奴の存在を再考するために必要である。

貞奴が演劇活動に取り組むに至る動機に着目し、貞奴の公演の記録や言説を分析した結果、貞奴の「お伽芝居」から「貞照寺」建立に至る一連の活動には一貫した彼女の意思があったと思われ、貞奴が活動を手放さざるをえなかった状況をその時々为社会情勢や貞奴の個人の体験を取り上げながら考察した。

本論文は三つの章と補論から構成されている。第1章では、論者はまず川上貞奴の生涯に大きな影響力を持った人物として、養母のカメ、夫の川上音二郎、公私に渡るパートナーの福澤桃介の三者を中心に、貞奴の家族、幼時体験、結婚、信仰といった私的環境を分析した。次いで貞奴が初めて女優として舞台上に立った欧米巡業中の体験に基づく演劇改良への貞奴自身の気づきに着目した。そして、明治期貞奴の演劇活動と政府の近代化政策の思惑とのもちつもたれつの上の近代化の象徴としての「女優」像の形象を考察した。

第2章は、貞奴の先駆者としての演劇活動である「お伽芝居」、「女優養成所」開設、「川上児童楽劇園」創設に焦点を合わせ、それぞれの活動の実態を把握するとともに、活動の動機、周囲の反応、さらに社会に与えた影響を検証した。

第3章では、貞奴の演劇活動の最後となった「貞照寺」建立を取り上げた。ここでは、私的な寺の建立の特異性を考察するとともに、松竹が撮影した寺と貞奴の映像から、女優として貞奴がカメラの前に立った動機を推測した。

本論文を通して明らかになったのは、明治から昭和初期にかけて日本の演劇が手探り状態であった中、貞奴が「お伽芝居」、「女優養成所」開設、「川上児童楽劇園」創設、そして「貞照寺」建立と挑み続けた活動の動機が演劇改良にあったということである。それは女優を起用し洋風の劇場を建設し、演目を見直し、脚本家を立て、俳優の地位を上げるというもので、これら全てが旧来の日本の演劇形態を改めることであった。この改良への熱意の根源は貞奴の欧米体験にあった。貞奴はアメリカで見聞した女優に与えられた高い社会的地位に感銘し、フランスの女優兼興行師ロイ・フラーとの共演からも強い刺激を受けている。貞奴はこれらを通じて日本の演劇が欧米に比べて発展途上にあるということに思いが至ったのである。また、貞奴は西欧の舞台で観客との一体感を体験している。貞奴は演劇改良を通じて、日本の観客ともこの感情を共有しようとしたのであった。さらに貞奴は欧米でレディーファーストを体験したことをきっかけに、自身が日本で受けている差別を改めて認識した。貞奴は日本社会においては、芸者、河原乞食、そして女性として、何層にもわたって蔑視される存在であった。そうした日本社会に潜む偏見に対する反感を内包しつつ貞奴は演劇活動を続けたのであった。

それにもかかわらず、彼女の演劇活動は正当に評価されないまま今日に至っている。それは、貞奴が自ら始めた活動を途中で他者に委ね放棄してしまったことで、その活動

があたかも貞奴の私的活動のような印象を周囲に与えてしまったことによる。貞奴の演技活動における挫折は戦争や経済不安といった社会状況や夫の病、パートナーの仕事の補助といった貞奴個人のやむを得ざる事情による面があった。

貞奴の演劇活動は近代日本の子ども文化の花を開かせたと言える。「女優養成所」開設では良妻賢母の重圧に耐えていた女性たちに女優という職業での自立の道を示した。「川上児童楽劇園」では関東大震災で行き場を失った若い才能を集め、個人経営の俳優養成所と劇場経営を目指したのである。これらの演劇活動は、まさに貞奴の演劇界における先駆者としての存在を物語っていると言えるであろう。

補論として、貞奴が期せずしてデビューを果たすことになった川上一座の欧米巡業に同行し、ボストンで客死した三上繁を取り上げている。貞奴の女優人生の始まりを知る彼の短い生涯もまた貞奴の人生の一部として貞奴ととともにあるべきだと論者は考えるからである。

論文審査結果の要旨

本審査は2020年1月17日、定刻通り13時15分から15時まで教育研究棟247において公開のもと実施された。外部審査委員として法政大学の高澤紀恵教授に加わって頂いた。

審査では冒頭、主査から提出論文についての内容を簡潔に要約し、中間発表において指摘された点をどのように反映させたかにも言及することが求められた。それを受けて田中氏からは予め準備されたレジメの提示があり、それをもとに論文の概要が丁寧に説明された。その後、各審査委員からは概ね以下のような感想・コメント・質問が出され、引き続きそれに対する応答が実施された。

- ・きわめて詳細に資料を集めたその情熱と長年の努力に敬意を表する。
- ・貞奴にとっては演劇のイデーはどのようなものとしてあったのか。
- ・貞奴の川上児童楽劇園設立及び運営へのモチベーションは何なのか。

・貞奴の演劇活動を単に彼女個人の事象として捉えるだけではなく、近代日本における都市社会の成熟という大きな歴史的社会的文脈の中で捉え返すと、論が更に充実する。

・貞奴の演劇活動はいわば失敗の連続であるが、そのような失敗の歴史を研究することの意義はどこにあるのか、つまり貞奴の歴史的意義はどこにあるのか。

・本論は貞奴という個人を扱った研究ではあるが、貞奴という人物を通して、明治・大正・昭和までの近代日本の歴史が「はっきり」と見えてきた。

・演劇活動に焦点を合わせて論を構成し、従来の研究において光の当たらなかった所に鋏を入れたという点は評価できるが、お伽芝居及び川上児童楽劇園のその後に関する記述がなお不十分である。

・追記の扱いとなっている「三上繁の物語」の部分は本論の中の然るべき所に組み込めればなお良かった。

・「三上繁の物語」はこれだけでも斯界に貢献する内容であるから、「追記」という形ではなく、「補論」として独立させた方がベターである。

・貞奴を「近代日本演劇の先駆者」として捉え直すという意図が明確で、論文構成の骨組みもそれにそってスッキリと構成（やや刈り込みすぎたという感がないでもないが）されている点が高く評価できる。

・貞奴の人生に寄り添いながら丁寧に叙述されている点が好ましく、高く評価できる。叙述も平易で読ませる。

・最晩年の貞照寺造営を演劇活動の延長として位置づけ、貞照寺は「貞奴の物語を演じる」舞台であり、「貞奴は貞奴の物語を演じる女優」であったとの指摘は、文学的想像力に富み面白くユニークではあるが、実証・論証不足の感が否めない。もし貞照寺が貞奴の最後の舞台であったとすれば、自分の人生を振り返った奉納絵で自身の女優時代のことが描かれていない点をどのように理解したらよいのか。

これらの質問に対して田中氏は真摯に回答した。質問の全てに対して明快な回答がなされたわけではないが、応答の中に今後更に改善・追究してゆくべき課題の方向性の発見があり、建設的な対話がなされた。

上記のような審査を経て慎重に検討した結果、提出論文は誤字脱字が目立つことを含めて更に改善・発展すべき余地を残すが、「女優第 1 号」というレッテルに彩られた従来の貞奴像に問題を投げかけ、一次資料の詳細な調査（それは巻末の年譜・参考文献一覧に反映されている）を踏まえた上で、演劇界の開拓者として、したたかに自分の人生を生き抜き、「耐える女性でもあったが、挑む女性でもあった」貞奴

の新たな像が明確に提示されていることを認め、審査委員会は学位請求論文が博士の学位授与にふさわしいものであるとの結論に至った。